

## B—13 天然繊維および化・合繊維下着の保温性について

和洋女大文家政 ○田口 秀子  
川村 一男

1. 天然繊維および化・合繊維からなる下着のもつ、保温性について追究を行なった。

2. 被験者は健康なる女子学生で、これに木綿、ペンベルグ、ナイロンおよび、ポリエステル混紡の各種衣料を着用させて、主として、腰部、腹部、膝部について電子管式皮膚温度記録計を用いて、すべて同時に皮膚表面温度を測定した。被験者は実験前すべて恒温室（温度23～25°C、湿度80～85%）において、環境によく順応させてから測定を行なった。その結果の大要は次の如くである。

3. 1) 裸体時の皮膚温は、起床時と昼間時において、起床時に各部の皮膚温は低い。

2) パンティ着用時には木綿または化繊およびショートパンティ、または5分長パンティのいかにかわらず、裸体時より皮膚温は上昇する。

3) 同種のパンティを2枚重ねて着用した場合には、木綿よりナイロン、またショートパンティより5分長パンティの方が皮膚温は高い。

4) 各種パンティと、各種スリッパを着用した場合、パンティの種類にかかわらず、また他の材質のスリッパに比較して、木綿スリッパ着用時に皮膚温は高い。

5) 測定部位別にみると、腰部は腹部に比較して皮膚温は、常に $0.1\sim 0.5^{\circ}\text{C}$ 低い傾向にある。

6) 膝部の温度は腹部および腰部に重ね着を行なっても、 $23\sim 25^{\circ}\text{C}$ の室温では、特に重ね着の影響は認められず、一定であった。